

～取り組みなどについて～

「授業デザイン」 ～授業を核とした学校生活づくり～

学校教育目標

「自ら対象に関わり、意味や価値を追求するとともに、仲間と高め合い、自立に向かう子」

◇主体的思考ができる ◇共感的感情がもてる ◇自立的行動ができる

○VISION「自立に向かう子」

- ・学校VISIONを元に「授業デザイン」の視点で授業実践研究を行う
- ・教科ごとに必要な資質や能力を精査し、各教科の特性を活かした授業を構成する
- ・「子どもの姿」「これからの社会に必要な力」「コンセプト」を明記した「授業デザインシート」により授業構成を顕在化する

社会科 5年 授業 デザインシート

VISION **自立に向かう子** 鈴木 達雄

教科テーマ **材と子ども**

社会科の学びのプロセス
 I-①社会的現象から問題を見つける
 I-②資料などの情報を基に、自分の意見に根拠を持つ
 II-①対話の中で、様々な考え方や相手の立場を理解する
 II-②現象を多面的・多角的に捉える
 III-①生活から捉えて現象をとらえる
 III-②社会的ものの見方・考え方に基づいて判断する

子どもの姿
 本学級の児童は、根拠に基づいた発言を行える力がついてきている。調べ学習も多く行い、自分で学ぶという姿勢も育ってきている。
 だが、自分の生活（価値観）を踏まげられると、とたんに発言が少なくなってしまう。加えて、発問力の高い子どもの意見に対して自分の意見を言えずに立ち止まってしまう子どもも多い。
 また強権性が高い分、人の意見にすることに躊躇する子どもも多い。

これからの社会に必要な力
 現代社会は、流動性が高く、人々の価値観もあっという間に変動していく。同時に、情報過多の環境によって、価値観の醸成が行われないまま現象に関わるる負えない人も多い。そのような社会において、自分の価値観がどのように形成されているのか、客観的に見つめることのできる自己認識力はとても大切である。そこで、明治という時代を児童することにより、今の時代の価値観の出发点をとらえさせていきたい。

コンセプト **学びを創る**

コンセプトについて
 主体的に学びを創るために、学習問題は子どものノートから言葉を探い全体で共有する。また、年表を学級で作ることにより、自己肯定感と他者意識が育つようデザインする。そして、現在の価値観の出发点（明治）これまで学習してきた時代（江戸）の価値観を対比することによって、子ども達自身が自分達の価値観に問い直しかけるよう学習をデザインする。

単元名 **文明開化と人々の暮らし** (全8時間)

ストーリーデザイン

総合学習「今昔物語～鎌倉編～」
 ○江戸末期の写実と明治時代の写実を見ながら、現在のその場所を探して歩く。
 社会科「人々の暮らしと文明開化」
 ○江戸時代の写実が明治時代の写実から、写真の中から手がかりを探し分類する。
 江戸から明治にかけて、大々変わったんだね。どうしてこんな変化をきたしたんだろ？
 予想がけしや、調べていなければならない。
 ○年表作り①②
 鎌倉の町がだんじりじゃなく、日本全体が大きな変化をきたしたんだね。
 廃藩置県、地租改正、徴兵制、学制、官営工場、四民平等ってなんだろう。
 ○出で来た言葉で、わからないものをノートに調べてみる
 調べてきたことを発表していく。
 江戸から明治にかけて、最近で大きな変化があったんだね。
 人々の暮らし方も変化があったみたいけど、
 ○人々の暮らし方がどう変化したのか、江戸時代と比較していくのよ。
 変身かけちゃって、生活そのものの考え方で変わっていったんだね。
 説明①②③
 ○学習問題
 「文明開化によって、日本人は未来を待たずに立ち上るようになった。という意見が出て、それと反対の意見も出て、話し合いを行う。
 ○次の学習への見直しを持つ
 明治時代は、今の私たちのものの考え方の出発点のなかで、
 この点と今の変化があるのかも。
 次に、明治の後期から大正時代について調べていこう。

手立て

①-① 具体的経験を積むことで、問題意識を育く。
 ①-② 具体物を通して、問題意識を育てるとともに、発展のある予想を立てるようになる。
 ②-① 問題の解決方法をグループで提示し合うことにより、様々な考え方に気づく。
 ②-② 江戸から明治にかけてどのような変化があったのかを調べることにより、今後の学習に対する足場を作る。
 ③-① 明治時代に生まれた多くの子どもが現在の社会にもつながっていることに気づくことにより、事業を自分自身にきつけて考える。
 ③-② 自分の考え「それ」のある他者の考えを尊重することで、社会的なものの見方を身につける。
 (1)(2)(3)の時間
 話し合いを行うことも、様々な価値観があるのだから、話し合うことが出来る。

調う子どもの姿
 今の自分の価値観は絶対のものではなく、様々な立場や時代によって変化するものなのだという事に気づく。

小中一貫校を目指した小中一貫教育の推進

○小中一貫校を目指した小中一貫教育の推進

- ・学校教育目標の一貫化、研究テーマの接続、研究内容の共有、教科研究の活性化を図る
- ・小中合同研究会において、授業研究・指導案検討等を行う
- ・教科・領域毎に義務教育9年間の教育課程の編成について研究協議を行う
- ・鎌倉会議（校長・副校長・校内教頭）において組織的な一貫化及び推進の大きな流れについて検討・調整する
- ・人的交流の活性化を図り、小中教職員が自由に行き来し、授業交流の取組が行える土壌を作る

○小中連携の方策についての外部発信の準備

- ・現在の取組や経過が、そのまま他の小中連携の取組への指針となると考えている



ユネスコスクールとして、ESD(持続可能な開発のための教育)の実践

- 平成24年度ユネスコスクールに認可
 - ・教科や総合的な学習の時間を活用し、地域の自然・歴史・文化などに目を向けた学習を展開する
- ESD実現目標を、「ホールスクール・アプローチの達成(学校全体の包括的な取り組み)」とし、実践を通して研究を進める
 - ・学校での教育活動を通しての自己の成長を振り返り、発表できる場の設定を検討する



- 小中一貫教育におけるESDの実践について、9年間のつながりある取組の検討を行う

全学年実施の宿泊学習、地域を活かした学習、「お弁当の日」

- 学年年齢に応じた宿泊学習の実施
 - ・1年生…学校1泊 ・2～4年生…県内1泊 ・5～6年…県外3泊
 - ・学年を通した縦のつながり(鎌倉中学校との接続を含む)と横断的な学習内容の検討
- 「鎌倉」の地域を活かした学習
 - ・滑川 ・史跡や文学館 ・片瀬ごま
 - ・海岸での水辺活動 ・谷戸の田んぼ学習
 - ・建長寺での体験活動 など
- 給食のない「お弁当の日」を年間13回設定し、時間や場所の制約のないダイナミックな活動を保障



児童の生活におけるうねりを考慮した行事配置

- 児童全員参加の行事の重視(入学式・卒業式など全校児童が参加)
- 各行事の設定における、年間を通してのトータルな視点と日常生活との関連性の重視
 - ・たてわりの運動会・鎌倉芸術館における音楽会・学習発表会(前年度は「まなびバ」)
- たてわり活動・校外班活動における児童間交流の重視、中学校生徒との交流の検討



保護者との連携、教育相談の充実

- PTAとの連携による土曜学校(大学教授による親子授業)を年2回実施
- 全保護者が学校行事に参加することができる「お手伝い制度」の導入
- 年3回のPTA総会及び学年学級部会開催によるコンセンサスの確立
- 部会設定日(年12回)、個人面談日(1学期・3学期)の設定による時間と場の保障
- スクールカウンセラーによる相談事業、SV・SC連絡研究協議会による対策対応強化

～地域における存在について～

3つの拠点と2つの寄与の使命を担って

教育研究をもとに、県内外の教育現場に貢献していく使命をもち、研究・研修の成果が、学校教育全体の充実・向上に貢献していくよう努めている。また、本校の使命として、3つの拠点と2つの寄与を挙げている。

<3つの拠点>

- ①実践的研究拠点 ②先駆的研究拠点
- ③教育養成拠点

<2つの寄与>

- ①大学への寄与 ②県内外教育機関への寄与

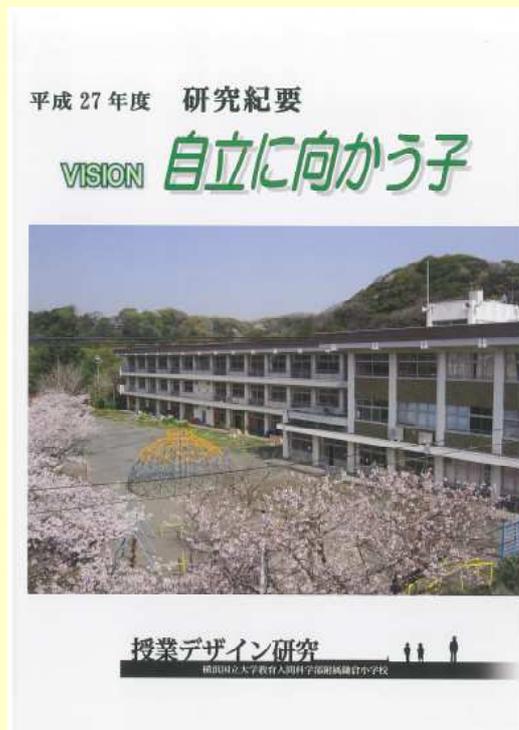
○授業デザイン研究

(平成28年度は10月14日・15日、
鎌倉中学校と同時開催)

○教育UPセミナー(平成28年度は2月11日開催)

○県内小学校の研究會に直接参加し、地域の研究會の場で共に高め合うよう努めている。

- ・鎌倉市教育研究會への全教員参加
- ・教員の地元市町小学校教育研究會への参加



～附属学校・本校の存在意義について～

小中一貫・授業デザイン・教員養成

小中一貫校への取り組み及び授業デザイン研究の発信だけではなく、横浜国立大学の附属学校として、教師を志す学生が実践的に学ぶ機会を増やしている。今後も大学と連携し、学生を教育していく場として、積極的につながり・関わりを強化していく。

現在のところ、教育実習生は他大学学生を含め、70名前後を受け入れ、教育インターン(大学院生)



や教育実地研究(大学1年生)、教職実践演習(大学4年生)など多くの学生が教員としての実践力を高める場となっている。

また、大学生がボランティア活動として学校教育に支援者として参加できる「鎌倉サポート」が充実しており、ほぼ毎週学生ボランティアが来校し、教育現場に関わり支援する活動が行われている。